7 水平リサイクル

2030年度までにボトルtoボトル比率50%を目指す
2025年度ボトルtoボトル比率は40.0%

ボトルtoボトルリサイクルは253千トン

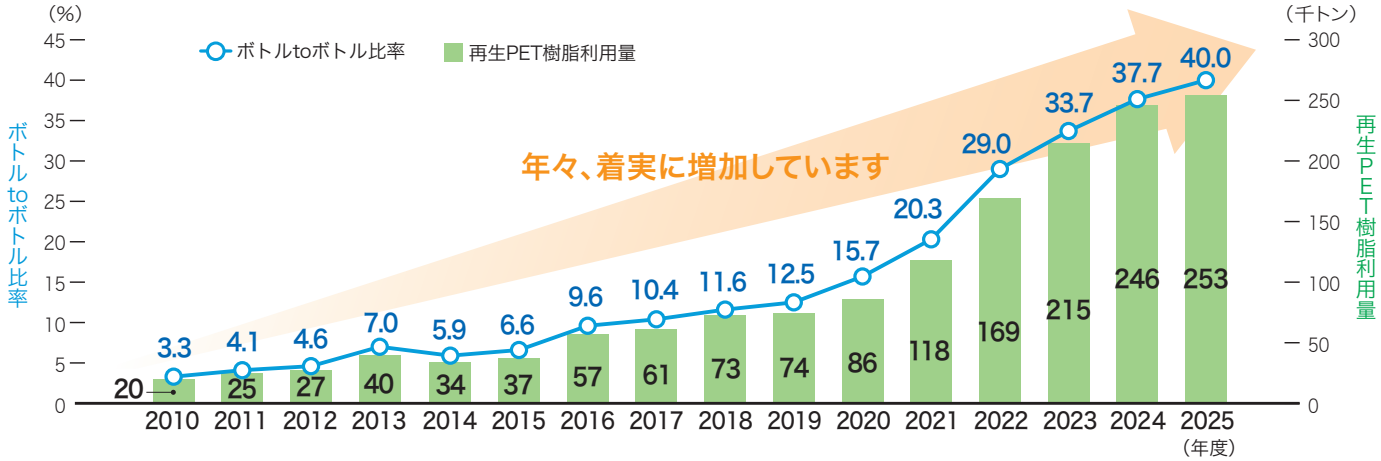
2025年度のボトルtoボトルリサイクル量は、253千トン（前年度比2.9%増）でした。国内で販売された指定PETボトル量633千トンに対するボトルtoボトル比率は、40.0%（前年度より2.3ポイント増）となりました。

水平リサイクルであるボトルtoボトルは、繰り返しリサイクル可能なので資源有効利用（繰り返し利用）という観点から優れたリサイクル手法です。

2021年4月に（一社）全国清涼飲料連合会が「2030年ボトルtoボトル比率50%宣言」を発表し、推進協議会も同じ目標を掲げ取り組んでいます。飲料メーカーの積極的な取り組みとそれに追従した再生PET樹脂の生産能力の増大により、さらにボトルtoボトルリサイクルが推進されると考えます。

ただし、回収された使用済みPETボトルに汚れボトルや異物が混入していると再生PET樹脂を製造する際に作業効率の低下や廃棄物が増えることから、質の良いPETボトルの回収が必要です。特に自動販売機からなどの事業系回収PETボトルの品質向上が課題となっています。

図13. ボトルtoボトルへの再生PET樹脂利用量とボトルtoボトル比率の推移



8 有効利用

2030年度までにPETボトルの100%有効利用を目指す
2025年度 指定PETボトルの有効利用率 99.0%

有効利用とは、使用済みPETボトルをリサイクルおよび熱回収も含め利用することです。

2025年度のリサイクル量は553千トンでした。リサイクルされなかった量は合計80千トンでその内訳は、リサイクル工程で発生する残渣が27千トン、残りの53千トンは可燃ごみ・不燃ごみとして排出された量として計算します。

残渣で熱回収された量は23千トン（海外分は含まず）、可燃ごみ・不燃ごみで熱回収された量は環境省の可燃ごみの有効利用率95%を使用し50千トン、計73千トンを熱回収量と推定しました。

その結果、2025年度の指定PETボトルの有効利用率は、99.0%になりました。残りは、概ね単純焼却や埋め立て処理されています。

有効利用率＝

$$\frac{\text{リサイクル量 553千トン} + \text{熱回収量 73千トン}}{\text{指定PETボトル販売量 633千トン}} = 99.0\%$$

図14. 有効利用率の算出（概略図）

